ウインブルドンが教えてくれたこと

神戸のフェド杯で日本がイギリスに逆転勝利を挙げた翌日、グラスコート佐賀テニスクラブでは、ウインブルドン選手権の会場であり、大会を主催する〝All England Lawn Tennis Club〟（AELTC）の関係者が来日しました。「ROAD TO WIMBLEDON」の日本国内予選が6日間に渡って開催されるためです。

全国の14歳以下のジュニアを対象とした男女各16選手が芝コートで試合を行い、決勝進出者の男女各2名が8月に開催される「ROAD TO WIMBLEDON」という本大会に招待されます。この企画がユニークなのは、単に試合を行って渡英する選手を決めるだけでなく、テニス選手としてのマナー、芝コートを大切に使用するエチケット、芝コートに必要な技術やフットワークなどを、AELTCのヘッドコーチのダン・ブロクスハム氏と、ウインブルドンのダブルス優勝者でイギリス女子選手の強化本部長のジェレミー・ベイツ氏らがコーチとして指導するところです。

選手は練習をしながら試合を行うため、練習合宿と試合がいっしょになった運営です。今回の選手たちが受けた指導は一方的なものではなく、何の練習をしているか、その練習がなぜ必要なのか、コーチは選手とのコミュニケーションを重視しながら、熱くスピーディーなものでした。ジュニアには理解しやすく、だから習得も早く、コート外から見ていてもわかるほど短時間で距離感は縮まり、信頼関係が築かれていく指導でした。

ブロクスハム氏は大会レセプション（立食パーティー）の冒頭の挨拶で、次のように全選手に話しました。

「この大会のレセプションパーティーには、東京から日本テニス協会の関係者、協賛している会社役員、佐賀市の行政の方々、大勢のメディアの方も皆さんを応援しに来られました。選手の皆さんは、これら大人の方々に自己紹介をして、たくさんのお話をすること。選手となれば、やがて優勝スピーチやインタビューを求められることになります。さらに高いレベルになると応援していただけるよう支援をお願いし、感謝を伝えることができなければなりません。いくらテニスが上手でも、スピーチや挨拶ができない選手は、立派とは言えないのです」

ジュニア選手にコミュニケーションの大切さを伝えるとともに、それは出席した社交下手な大人への協力要請でもありました。その甲斐あって、32人の子供たち一人ひとりが、出席していた副市長、協会専務理事の福井烈氏をはじめ、協賛会社の各役員、大会運営関係者の全員に積極的に挨拶し、思い思いの話をしていたようです。主旨を理解した大人も、14歳の子供たちの話に積極的に耳を傾け、話は大いに盛り上がっていました。

大会レセプションとは、日頃なかなか話ができないテニス関係者、将来、自分のスポンサーになるやもしれない支援者、活躍を取り上げていただけるメディアの方々など、選手にとっては情報と機会の宝庫だと確信しています。しかし、多くのレセプションでは、選手と支援者の交流は少なく、選手同士で会話したり、早々と退席しようとしたりする残念な選手を目にすることがあります。さすがは社交上手な英国文化とウインブルドンです。選手にレセプションの主たる意味を、子供たちだけでなく、大人にも実践させたのでした。

雨の日には、クラブ内にある室内砂入り人工芝のコートで行いました。雨上がりの翌日に屋外コートでの練習と試合に期待したジュニアたちでしたが、コーチは言いました。

「芝のコートは生き物、扱い方が大切。無理をすると芝コートは傷んで使えなくなってしまう。今日もたくさんテニスをするので、芝コートには入りません。室内コートにいきましょう」

ジュニアたちに芝コートの大切さまで伝えてくれていた意味は大きいと、グラスコート佐賀の緒方氏も感心していました。

ウインブルドンでの本大会が8月にあるということで、渡英する選手は全日本ジュニアに出場することはできませんが、それ以上に日本で学ぶことのできないテニスとエチケット、そして大切なコミュニケーションを佐賀で体験し、ウインブルドンの舞台で14歳にして実践できることは何事にも代えがたい素晴らしい機会になることは間違いありません。来年以降もウインブルドンが佐賀で「ROAD TO WIMBLEDON」を開催することを望むばかりです。

練習中の風景。貴重なレッスン内容だ
（写真◎本人提供）

かわてい・なおひろ◎1970年4月18日生まれ、兵庫県出身。国際レフェリーの最高資格「ゴールドバッヂ」として、20年間に渡り、国際大会スーパーバイザーとして活躍。現在、ITF（国際テニス連盟）オリンピック委員会の委員、またATF（アジアテニス連盟）常務理事として各国のテニス発展に尽力。国内ではJTA（日本テニス協会）常務理事兼コミュニケーション・マネージャーとして選手や大会の相談役も務め、2009年から楽天ジャパン・オープンのトーナメントディレクターに就任した

教えて川廷さん

質問 ダニエル太郎選手がツアー初優勝を飾りました。もともとはポルトガルの大会に出場するはずが、本戦に出られるのでイスタンブールの大会に飛んできた、と言っていました。そんなに直前になって変更できるのでしょうか。ポルトガルの大会は迷惑にならないのでしょうか。そもそもダブルエントリーは、してはいけないと聞いたことがあるのですが…。

（中学生・女子）

A 複数エントリーは可 上位大会、本戦を重視

男子の国際大会は同じ週に複数のATP500、250、チャレンジャー大会、そしてITFフューチャーズ大会が開催されています。選手は希望する複数の大会にエントリーすることが可能で、エントリーした大会の本戦リストに自分の名前が載れば上位カテゴリー大会を優先します。

ダニエル選手は同週に開催される250の大会にエントリーし、いずれかの大会に出場する予定を立て、どちらも予選からとなればポルトガル大会に出場する予定だったと思われます。しかし、大会直前にイスタンブールの本戦出場予定選手の欠場が相次ぎ、エントリーしていたダニエル選手が本戦に繰り上がりました。この場合、ポルトガル大会の予選リストにあるダニエル選手の名前は自動的に消えるのです。よってイスタンブール大会の本戦に出場することが、エントリーしていた選手としての責務となります。予選選手が随時変更されることは、大会側はプロセスを理解をしているので特に問題とはなりません。

ご指摘のダブルエントリーとは、同一週に公式大会の本戦が開催される複数の大会にエントリーし、それらの予選本戦を問わず2つ以上の大会でプレーすることを認めていないルールのことを示します。